昭和51年3月22日発行(毎週月曜日発行)昭和36年10月12日第三種郵便物認可　株式会社　建設ジャーナル刊

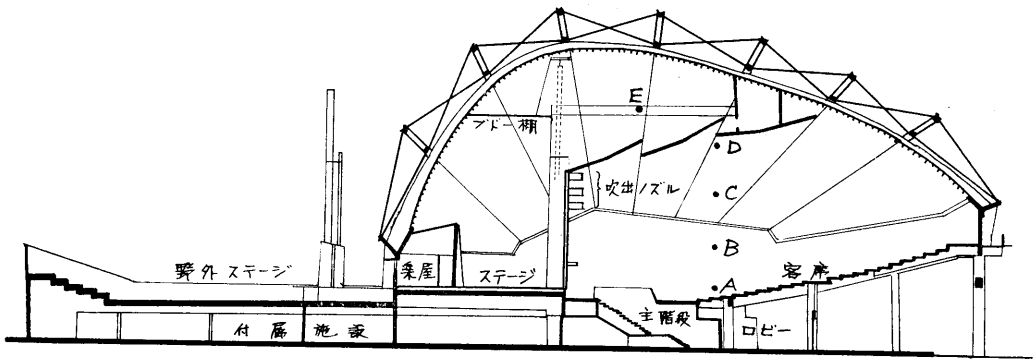
週刊建設ニュース 710

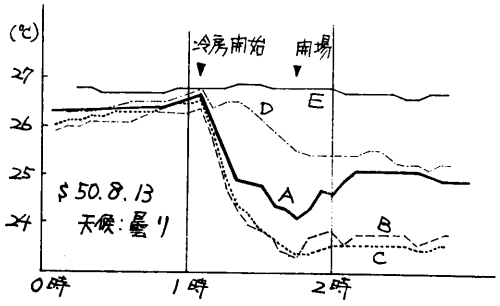
3月第4・5週合併号/'76

■特集／川上建築設計事務所作品

■グラフシリーズ／シルクロード1万キロを行く(13)……岡野忠幸
■論評／「高崎でのブルーノ・タウト」について……村瀬淳一郎
■ろんだん／『建築』の休刊にふれて……丸宮忠三
■現代建築再訪／「傷だらけの市民会館」……阿部成治
■全国の建設工事（巻末）

新シリーズ　建設オピニオン「私の航跡」　第3回　稲垣　登





I

今年で四年目を迎えた都城の生活で、最も私の興味をそそった建築、それはもちろん菊竹清訓氏の設計した都城市民会館である。あの乳母車のホロのような、シュロの葉のような、またヤマアラシのような鉄の屋根は周囲を威圧し、これに接した多くの者は「よくもここまで」と、見果てぬ夢を見たような気持になる。しかし、一方では、雨漏りがした、グロテスクなだけだ、という批判の声も聞かれる。私は、建築を少しは知っているつもりなので、この対立する評価をどう説明したらいいものだろうか、と考えた。そして、とにかく中へ入ってみたい、外から見ただけではわからない、と、その時まで思考を一時中断することにした。

その日はなかなか来なかった。しかし、遂に、及川恒平と五輪真弓のコンサートという形でやってきた。私は胸を踊らせて、開場の三十分前にピロティの下へやって来た。左のドアが開いていたので、中へ入れるのかと思って行くと、ここは当日券売り場だという。後で知ったのだが、ピロティの端にある切符売場は主催者に都合が悪いので、今ではみなこうして当日券を売るのだそうだ。

いよいよ開場。私は、入口でプログラムを受け取る間も惜しいようにして中へ入った。ロビーはコンクリートの打放し。今は珍らしくはないが、十年前には冒険であっただろう。しかし、少し暗く、なぜかあまり落ちつけない。それで、すぐオーディトリアムへ入る事にした。二十段ほどの階段をあがりながら前へ視線を向けると、何と目の前に緞帳がある。さては階段を間違えたな、とまわりを見たが、みなこの階段を使っているようだ。私は、当惑を残したまま、観客席へ足を踏み入れた。

だが、そこで見出したのは、新たな当惑の種だった。それは、座席の貧弱なことである。プラスチックを成型した椅子が、床に無雑作に並んでいる。まてよ、これでは満席か空席かかで音の状況が変わりすぎるのではないだろうか、と、私は大学で学んだ知識を絞り出しつつ自分の座席を捜した。

ち—四十七番は簡単に見つかった。椅子に腰をかけ、先ほど入口でもらったプログラムに目をやると、読みにくいのに気づいた。そうだ、さっきから気づいていたが、この観客席は、少し暗すぎる。上を見あげても、天井にはライトがついていない。おや、と思って見まわすと、どうやら脇にライトを上向きに置き、天井と壁に光を反射させる間接照明をやっているようだ。そのライトが置かれている所の近く、プロセニアムのそばの壁には、空気調和の吹出ノズルが口をあけていた。これらのものに、一般の建築と違ったもの、即ち菊竹清訓を認めざるを得なかった。

II

あれから何度市民会館を訪ねたろうか。何度訪ねても、市民会館は私にとっ

現代建築再訪

―傷だらけの市民会館

（その1）

阿部成治

て謎だった。確かに一般の建築とは違っており、十年前は更にそうであったと思われる。しかし、その違いがどういう意味をもっているのか、どういう原理でこうなっているのか、が理解できなかった。それに、初めて会館を訪ねた時の当惑も残されたままになっていた。

私は、この「謎」のもつ魅力にひかれ、二人の学生と一緒に、この市民会館に取り組むことにした。そして、四カ月にわたって手あたり次第に調べていった。まず会館の人の説明を聞き、設計修理に関係した人を捜し、菊竹氏の設計論を読み、雑誌の記事を捜した。更に、新聞記事をひっくり返し、会館の使用者の意見を聞き、遂には実際に空気・光・音の測定を行なった。

こうしてわかったことは、先ず、菊竹にとってこの都城市民会館の設計は決して手慣れたものでなく、かなりの産みの苦しみがあったようだ、という点だ。当初の案は与えられた条件を普通の手法で処理するものだったが、そのデザインの平凡さの故に見捨てられたようである。次に、オーディトリアムの形式からのアプローチが行なわれたが、これもものにならなかった。そんな時に投げかけられたのが「菊竹の、この建物がもし火事で焼け、最後に残るとしたらどの部分だろうか」という問いである。こうして、オーディトリアムの客席が「残る部分」であり、屋根が変る部分であるという認識に達し、これに沿ってその後の設計が進められていった。残る部分は残るように、変る部分は変えれるように、と設計されたのである。屋根の支持形式として最終的に選ばれたのが、あの柱が一ヶ所に集中した形である。そして、オーデの客席の床は、そのまま建物の裏へ伸び、野外ステージの床と付属施設の屋根になっている。

次は設備計画だ。最近の建築では設備の比重がかなり大きく、オーディトリアムのような閉ざされた空間では特にそうである。ここでとられたのは、「空気・光・音を統一するという方法である。音はプロセニアムに囲まれた舞台から客席へと発せられ、その両脇には屋根を支える放射状の柱が集中している。そこで、プロセニアムの両脇のコンクリートの「残る」壁に筒型の吹出ノズルを置き、そこからホール全体に適温の空気を送る。光も、その脇に投光器を天井むけて置き、間接照明をする。こうして空気・光・音は同一の原理で処理され、残る部分を更に浮き立たせる事となったのである。

ここまで知って、私はほっと安堵することができた。謎は解けた。建設当初の雨漏りなどは、ささいなミスに過ぎず、この建築のよさを傷つけることはできないだろう。という気がした。

最近の建築には「思想」がない。そこでは建築を無難にまとめあげることに力が置かれている。確かに、建築にはいくつかの満足させねばならない条件がある。そこで、設計ではこれらの条件をいかに満たすかが問題となる。ところが、

これらの条件はミニマムであるにも拘らず、建築を社会的に、そしてその種類毎に大きく規定してしまう。こうして、その表面だけは違うが、本質的には同じ建物が建ち並び、地方の特性を破壊し、都市を陳腐化していっている。先ずまとまりのよい案をつくり、次にそれをどう化粧するか、なのである。

ここでは、建築家は建築の奴隷になり下がり、その創造性は窒息させられているかに見える。経費が余分に必要だとか、ある条件がうまく満たされていないとか、法規に低触する、などの理由で、出る杭が打たれているのである。

この現状を乗り越える道は、ただ建築物の形を変えてみたり、化粧を工夫することではない。それは、建築や人間にとって重要なものを基本に置き、建築を再構成することである。そうすれば、建築の満たすべきミニマムもおのずと満たされる、いや、そうして初めて、諸条件が最も好ましい関係で調和しあうのである。

都城市民会館は、その力をふり絞って、このことを我々に語っている。この市民会館こそ、「俗」を否定し「俗」を越えるものとして、「反俗」の名にふさわしい建築である。雨漏りなどの欠陥は、設計期間の不十分さなどが原因で生じたささいなミスにすぎず、この建築の価値を否定することはできない。

私は、こう考えた。

Ⅲ

このように結論づけてはみたものの、私の頭のどこかには、会館で初めてコンサートを聞いた時の当惑がまだ残っていた。しかも、調査が進展するにつれ、いろいろな雑音が私の耳に入ってきた。私は、またもやこの会館を考え直さねばならない羽目に追い込まれてしまっている自分を発見した。

市民会館の設計過程を知った後でコンサートを聞きに行ったある日、私は、鉄のテントの下の冷たい椅子に座っている自分に気づいた。コンクリートの床にプラスチックの椅子の置かれた客席、それをスッポリと覆った屋根は、まさしく鉄の仮設テントである。仮設テントであればこそ、いくつかの欠陥が生じたのであろう。

このテントは、ラスシートのモルタル塗りを鉄板でおおった、というものである。雨はこの鉄板をかしめた部分から、毛細管現象により侵入した。従って、都城は台風の進路にあたっていたから雨漏りがしたのだ、というのは正しくない。施工の可否を慎重に考慮すれば、予測できなかった雨漏りでもない、との話しだった。結局、かしめた部分にコーキングを施すことで雨漏りは止まったが、この補修にはかなりの費用がかかり、その大半は菊竹氏の懐から出たという。その限りでは問題はないのだが、このコーキングや鉄板の塗装の耐用年数はあまり長くなく、年限がくればやり直さねばならない。塗装は既に時期が来ているらしいが、あの屋根のカーブからわかるように、足場代が馬鹿にならないので、当面放っているのだ、という。

仮設テントのもう一つの重要な問題はその遮音性のなさである。大粒の雨が降れば、ホールには雨音が聞こえる、あたかも雨漏りを警告するかのように。更に悪いのはサイレンが聞こえることで、演奏中にこれがあるとどうしようもなく、演奏を中断したこともあるそうだ。オーディトリアムは外部の騒音から保護されねばならないこと、そして遮音力は壁体の重量につれて大きくなることは健築の常識である。オーデ設計のイロハが、残る部分と変る部分というメタボリズム論のために犠牲にされてしまったのである。

また、舞台上部のブドー棚の高さが、あの蝸牛管と同じく渦巻形をした屋根カーブに押さえられて十分とれないのも問題だ。高い幕が飛びきらず、他の会館から持ってきた幕を使う時には苦労するそうだ。なお、客席上部ではこのカーブは不必要に高い部分もあり、天井と屋根との間が広く開いている。

ところで、設計者が「変る部分」と考えたこの仮設テントの張り直しが、会館竣工後のこの十年間に考えられたことがあるのだろうか。答えは「否」である。確かに、この鉄のテントはその後の技術・要求の進展に、いや設計の水準にすら対応できないものであった。まず、遮音性を高めるために、ラスシートのモルタル塗りでなく、重い材料——例えばコンクリートを用いねばならない。舞台の

発明　監綬褒章　受賞・特許　日,米,英,仏,独,伊（含む出願中）
特許　避難注水具〈上下固定式〉

サイタ式救助袋・幕

あなたの事業を育てる大切な社員とお客さまを守る
避難設備・設計の専門メーカー

斎田工業株式会社

本社　東京都文京区西片2丁目1番3号 TEL(813)5801～6

避難器具だけは…設計，施工，技術が優れ
あなたの生命を保証する専門メーカーへ

上部を、もっと高くしないといけない。それから、雨仕舞いや塗装などの補修が簡単にできることも必要な条件である。

しかし、この会館の「残る部分」は、現在の屋根に対応してつくられたものに過ぎず、これをコンクリートに変えたり、高さを変えることは、梁、柱、そして基礎部分の改造を前提とする。それは、この市民会館に組み込まれているメタボリズムをはるかに越えるものであり、全面改築を意味せざるをえない。

そうだ、この屋根で改造された部分が一つだけある。それは、屋根の上に出ている梁を覆っていたモルタルがはがされたことである。あの傾斜した梁にモルタルを塗る作業は、施工が困難であり、その完璧を期すのはもともと無理だった。防水塗料の亀裂から水分が侵入し、あの不必要に厚いモルタルを何とか支えていたラスを犯した。二トンのモルタルが落ちたのが夜だったことは幸運だった。もし開場前の人が集まっている時だったら、大変なことになっていたに違いない。直ちに、まだ落ちていないモルタルをはぐ作業が開始されたのは、当然のことである。

市民会館の改造は、むしろ「残る部分」について考えられていた。それは、まず、私が初めて会館を訪ねた時に当惑したあの主階段をつぶそうか、という案である。やはり客席の一番前へ出てくる主階段は困る。特に、クラシックの開演中にここから入って来た人が、自分の座席を探すのに気がひけてここに立つのは、ホール全体に悪い影響を及ぼす。この階段をつぶす案が実施されていないのは、この階段が空調の排風口を兼ねているからである。また、他の階段ではすべてホールの脇にしか出れないため、観客に不便になる点も、改造を押さえている。最も望ましいのは、ホール中央に主階段をつけかえることだろう。だがこれは大改修となり、他の空間にも影響を与えるので、検討もされていないようだ。

次に問題なのは、舞台と楽屋の狭さである。ステージの奥行は八mだが、実際に使えるのは七mである。プロセニアムの幅二十m、高さ八・九mに比べ、これはあまりにも浅すぎる。おかげで都城では本格的なオーケストラができないし、演劇の時などにもいろいろと不便だそうだ。楽屋はこの舞台のすぐ裏にある便利さでは満点だが、小さな部屋が四つ並んでいるだけで、演技や楽器の練習にはもちろん、道具を置くにも狭いことがある。通路も狭く、道具類が楽屋から通路へとはみ出た時や、かさばる衣裳をつけた時には、歩くのも一苦労だそうだ。改造案というのは、この楽屋をつぶして舞台にし、楽屋は、リハーサル室、浴室、トイレ、大会議室などと共に、野外ステージ部分につくる、というものである。

実は、この野外ステージがまた曲者である。これは、今までに二回だけ使われた。ところが、そばにある裁判所、そして小学校はもちろん、民家からも音に対する苦情が出て、結局使わないことになってしまった。現在は、狭い楽屋では練習できない人が、ここをリハーサルに使うぐらいだが、その足音が下にひびくため、下で結婚式が行なわれる日などは非常に神経を使うそうだ。

この野外ステージは、当初の市側の設計条件にはなく、設計者の方から場所がとれるからと、周囲への配慮も、そして下の部屋への十分な考慮も欠いたままつくられてしまったものである。なお、周囲への配慮不足は、結婚式場などへの玄関がアプローチの不便な南側にある点についても言える。現在は西側の車寄せが玄関に改造されているが、そこからの各部屋へのつながり、通路の幅などで不都合が生じている。なお、南玄関などのサッシは「変る部分」だからと、ラワンでつくられているため、雨の日にはふくらんで開閉がしにくい。新設の西玄関のサッシは、もちろん金属製である。

これらの事実を知り、私は菊竹のメタボリズムに敗北を宣せざるをえない気持になった。彼のメタボリズムは、もともと住宅に関してつくられ、スカイハウスで試みられたものである。住宅においては、家族と住宅との対応は絶対的であり、しかも家族の変化は大きい。このため、住宅は家族の変化に応じることを要求される。しかし、住宅以外の建築物では、利用者と建築との対応はよりルーズであり、要求の変化に対しては種々の対応が都市全体で成されているのがわかる。

なるほど、建築が「とり替え」というメタボリズムで維持、運営されていることは事実である。しかし、「残る部分」と「変る部分」との判別には非常に慎重な検討が必要とされるし、残る・変るの差が常に絶対的なものだとは限らない。まして、それは「火事で焼けたらどこが残るか」という問題ではないし、長い耐久力を持ちうる建築の一部を、わざと寿命の短い材料で、とりかえが可能なようにつくることでもない。

しかも、建築は決して「残る部分」と「変る部分」とをルーズに結びつけたものではなく、両者は抜き差しならない関係で結合されているのである。この相互規定は、建築技術の発達で更に複雑になりつつある。従って、変化には自づと限度があり、モルタルの屋根をコンクリートに変えたり、奈落のない舞台に奈落をつけるようなことは、一般に無理な相談なのである。このため、メタボリズムを基本に据えることが、かえって建築のメタボリズムに枠をはめてしまう結果になりかねない。長い使用に耐えうるには、メタボリズムのシステムよりも、一定の水準を確保することの方がむしろ重要なのではないだろうか。

これらの、菊竹氏のメタボリズムの限界を都城市民会館の十年の歩みは、何よりも雄弁に語ってくれる。なお、彼自身、あのスカイハウスのメタボリズムにも限界があることを認めているようだ。

（次号につづく）